

## トーマス・マンの「大公殿下」について

三 枝 圭 作

トーマス・マンは大作「ブデンブローク家の人々」の完結後およそ10年で、彼の新婚生活の最初の芸術的結実として、彼自ら長篇小説の形式による喜劇の試み、あるいは理性的な Märchen であると呼んだ<sup>1)</sup> 第二番目の長篇「大公殿下」を世に送った。

当時のドイツの批評界は、前者の好評と裏腹に、この作品に種々の非難を浴びせるとともに、後年になってもその内容を詳細に論じた評者は少ない。

しかし作者自身この作品の「安易過ぎる」<sup>2)</sup> 点は認めながらも、折あるごとに不評に対して自己弁護を繰返しているところからも、筆者はこの作品をより仔細に検討してみる必要を感じた。また、この長篇の底が意外に深く、彼の作品系列において重要な位置を占めていることにも気づくがためである。

この長篇の筋を要約すれば、物語の舞台はドイツのある破産に瀕した貧乏公国である。主人公はこの公国の第二王子で、王位継承者の代理として、装飾的象徴的な役割を演じている。この王子はやがてアメリカ合衆国からこの国へ舞い降りてきた大金持の娘と恋をし、結婚する。そこで、この小国はその娘の父のもたらした大金のお蔭で困難な財政状態を脱する。

この平凡な筋は「ブデンブローク家の人々」という偉大な着想の後だけに、作者の問題回避として、あまりにも皮相な娯楽小説（事実、数十年後に娯楽映画化されたこともある）であり、王子と娘との恋物語も独創性に欠け、結末は happy end に過ぎるなど、各種の不評を招くこととなった。

作者は自作に向けられた非難のなかで、兄 Heinrich に宛てた手紙で、

Über »K(önigliche) H(öheit)« habe ich seit Bahr nicht viel Ermutigendes zu sehen bekommen. Das Buch wird von der Kritik entschieden nicht recht für voll, nicht recht ernst genommen, und ich habe den Eindruck, daß der Erfolg des Deinen—im höheren Sinne—viel größer ist.<sup>3)</sup>

と嘆いている。

1) Thomas Mann : Gesammelte Werke in zwölf Bänden. S. Fischer Verlag 1960, Band XI, S. 118. 以下同全集からの引用は、ローマ数字で巻数、アラビア数字でページ数を示す。

2) XI, S. 118

3) Thomas Mann / Heinrich Mann, Briefwechsel 1900—1949. S. Fischer Verlag, 1968, S. 84

しかし、作品が外観上重厚さに欠けて見えるのは、ひとつに彼が従来の叙事的手法を用いながら、物語を一般的象徴的表現の領域に置き換えているからであって、ここに実は彼の新しい意図、つまり Märchen への志向が認められるのである。

Ich verstehe, daß die Detailmenge, die zu arrangieren ich mich nicht verdrießen ließ, daß die Akribie eines Schriftstellers, der durch die naturalistische Schule gegangen ist, über die innere Natur des Buches täuschen konnte. Aber die Geschichte des Kleinen einsamen Prinzen, der auf so scherzhafte Art zum Ehemann und Volksbeglückter gemacht wird, ist schlechterdings kein realistisches Sittenbild aus dem Hofleben zu Anfang des zwanzigsten Jahrhunderts, sondern ein lehrhaftes Märchen.<sup>4)</sup>

これは作者がこの作品についての小論のなかで上の点に触れている箇所であるが、作品が Märchen である以上、例えば、Inge Diersen がいうような王侯と大金持との結合が国民に幸福をもたらすというイメージの古さなどは、それほど問題にしなくてもよい。

重要なことはマンの童話的なものへの関心である。これは以後彼の伝説的、神話的なものへのそれに連なっていくが、彼の作品に現れた顕著な転回であり、マンの作品系列においてこの作品のもつ重要な意義のひとつであるといえよう。

作品の中心をなす王子の恋物語の周辺には、Märchen の小道具が配置されて、その効果が高められている。例えば、旧城内の中庭にひと株のバラがある。ところがこのバラには薄気味悪い特性があって、匂わないのである。香りが無いわけではないが、そこから漂いでる匂いは「カビの匂い」だった。やがてはいつか歓喜の日がおとずれて、このバラは自然な香ぐわしい香りを放ち始めるだろうと、巷間では伝えられている。

これと似たような話は旧城の「フクロウの間」にもある。ときどきその部屋のなかで物音や話し声がするのだが、その音の根源をつきとめることができない。噂によれば、これは大公一族に何か重大な決定的事件が起るのを警告しているらしい。そういえば、大公の臨終が近づくや、その部屋のあやしげな物音は異様に大きくなっていくのである。

また、これと関連して、ジプシーの老婆から出たある種の怪しげな予言が昔から言い伝えられている。それによると、「片手」の殿様が現れてこの国に幸福をもたらすというのである。髪ふり乱してこの女は言う。

Er wird dem Land mit einer Hand mehr geben, als andere mit zweien nicht vermöchten.<sup>5)</sup>

物語の結末で、主人公の結婚を祝福する民衆の歓呼のどよめきは Märchen の終りにふさわしい。

4) XI, S. 570f.

5) II, S. 47

この長篇に続く第三の長篇「魔の山」においても、マンは童話的要素があることを認めて

Zudem könnte es sein, daß die unsrige mit dem Märchen auch sonst, ihrer inneren Natur nach, das eine und andre zu schaffen hat.<sup>6)</sup>

と述べている。

また、彼はこの作品に結婚直前の体験を数多く投影しているが、彼が未来の妻 Katja 宛ての手紙で、彼女を王女、自らを一種の王子とみなしている<sup>7)</sup> という意味のことを述べているのは、彼の Märchen 作家としての面目を示したものであろうか。

作者の息子 Golo は「父の思い出」と題して 1964年にバイエルン放送局を通じておこなった講演のなかで、次のように述べて、彼の父を Märchenerzähler と呼んでいるが、以上の点についてはこれで十分であろう。

Im Grunde fühlte er sich mehr als Märchenerzähler denn als Realist oder gar Naturalist. Es war eine andere, dichterische Welt, die er aufbaute, nicht die wirkliche Welt, die er fotografierte.

長篇「大公殿下」が一種の Märchen であるということは上に見た通りであるが、その色調はまずペシミスティックなそれとなって現われている。著者自身この辺の事情を

Aber obgleich entstanden in heiterer Lebenszeit und heiter in sich selbst, hat sie von Anfang an ein eigentümlich beschattetes, fast melancholisches, ich möchte sagen: vernachlässigtes Dasein geführt. Zuweilen war es mir leid um sie.<sup>8)</sup>

と説明しているが、これは10年前の大作「ブデンブローク家の人々」と共通の基調音を暗示している。ある家族の没落が、ここでも、似たような調子、同じような視角で、イローニッシュにいさか冗長に語られ、すべてが絶望の淵へ沈んでいくように見える。

主人公の兄 Albrecht は死との共感にとりつかれていて、生活意欲のきわめてうすい病弱な少年 Hanno Buddenbrook と共通している。スラブの血を引く大公妃 Dorothea は、オランダ生れの芸術家肌の美人 Gerda Buddenbrook と親類で、幽霊のように宮殿を徘徊する。高齢の大公 Johann Albrecht はある恐ろしい病に罹って亡くなるが、ほんとうは、「時代に合わない男」(der Unzeitgemäße) Thomas Buddenbrook のように、人生への絶望の故に死んだのである。身分に合わぬ結婚をして零落している大公の弟 Lambert 公は、似たような経緯で家族に不名誉をもたらす Gotthold Buddenbrook に相応している。

作者は後年この長篇が「ブデンブローク家の人々」の「後継者」<sup>9)</sup> であると述べているが、これ

6) III, S. 10

7) Thomas Mann: Briefe 1889—1936. S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main 1962, S. 56

8) XI, S. 573

9) XI, S. 573

は言葉通り受取ってよかろう。また György Lukács はこの作品をマンの前の大作と同様に没落の叙事詩であるとしているが、その当否は別として、この作品が「ブデンブローク家の人々」の延長上にあることはまちがいない。

Christoph Geiser によれば、<sup>10)</sup> マンは「大公殿下」の主眼を、作り上げたものに、つまり、「徹頭徹尾こしらえられた書物、一寸一角まで計算しつくした」<sup>11)</sup> 点において、「ブデンブローク家の人々」においては、問題の生成に主眼をおいて、両者を区別しているとしている。

これを先の Lukács によって補足すれば、次のようになる。「つまり第一作の壮大さは、後からつけくわえられていったものであり、そこから次第に成長してゆき、その附加部分の豊かさによってふくれあがっていったのである。この計画されたわけではないもの、望まれたわけではないものが、彼の第一の長篇小説に、きわめて深い典型性、同時代のすべての作品にぬきんでる普遍性をあたえているのである。」<sup>12)</sup>

第2作の方はどうか。同じく Lukács の説に耳を傾けよう。

「マンはここでは、7年前のときより、もっと短篇作家的にみている。状況とぶつかり合いをより抽象的に設定することによって、より鋭く、より集中的にみている、と。だからこの小説の対象は、ある家族の歴史なのではあるが、それをとりまく世界とのつながりは、かつてのそれにくらべてはるかにゆるくなっている。そして、こうした典型は、たんに理論的なものにすぎず、われわれとしては、それが典型的であり、どこかにはこうした例もあるだろうとするより以上のものではない。とはいえ、私はまた、当然、次のようにもいえるだろう。それはある君主の家族をあつかつているのであり、まさにそうした社会学的位置によって、彼らは通常の共同体からはじかれ、そのことによって、彼らの生活は、空想的に、非合理的に、＜興味ある＞ものとなる。彼らがその中で生きてゆかねばならぬ人間共同体との大きなへだたりによって、接触や、出あいのすべての体験が、まったく理論的に典型的に、事件へと、短篇小説的に凝縮される、と。つまり、この長篇は、最初の長篇にくらべて、より集約的に描かれているのである。一例をあげてみよう。前の作品では、四つの世代がとりあげられているのにたいして、この作品では、二つの世代があつかわれているにすぎない。この作品では、作品の中心となる寓話は、より単純に、より単線的になっているにもかかわらず、個々のエピソードはより強く独立性をもっている。人物たちの相違はより鋭くなり、その雰囲気は彼らの存在とうまくにじみあっていない。そしてこうした強調のなかには、さらに、ある種のかすかなわざとらしさ、個々の特徴の誇張された鋭さ、象徴的な気分的手法のあまりにひんばんな、あまりにあからさまな使用などが、あらわれている。といっても、これはほんのわずかな箇

10) Christoph Geiser: *Naturalismus und Symbolismus in Frühwerk Thomas Manns*. A Francke AG Verlag, Bern 1971, S. 58

11) XII, S. 96

12) ジェルジ・ルカーチ 片岡啓治訳「ロマンの魔術師」立風書房 1971年、76ページ

所のことであって、基本的感情は、そのふくらみと、より強い集約性の感情である。」<sup>13)</sup>

冗長を厭わずあえて引用したのは、この部分が共通の基盤に立脚した両作品の違いを見事に説明しているからである。このすぐ後で Lukács が、前者ではあの生の衰退はわれわれの眼前で進展し、それとともに、諸人物はごく自然の成りゆきとして、彼らが以前あったところのものの代表者となってゆくのであるが、後者の場合には、その衰退そのものが、そもその始め、出発点となっているという意味のことを述べている<sup>14)</sup>ように、この作品の主人公をはじめ登場人物は前者の後裔として冒頭から危険な深淵に臨んでいる。

主人公の若き王子 Klaus Heinrich は、生来、象徴的、代表的役割を演ずるべく運命づけられている。彼は特別の勉強をしないで大学に入学し、軍籍にも身を置くが、この士官の軍事に関する知識は皆無である。また、彼は部下の作った草稿そのままに演説をしなければならない。つまり、彼は Dr. Überbein がいうように、「象徴的な存在」(sinnbildliche Existenz)、換言すれば、「形式的な存在」(formale Existenz)である。従って、彼の使命は「べつに身ぶりがなくてもすむことを、ことさらに美しい身ぶりでやってのけることだけ、また、人間のもろもろの事柄に荘重な気分をあたえることだけ」<sup>15)</sup>である。それは彼の兄が見抜いているように、自分の合図で列車が出発するものと錯覚している頭のおかしい人物 Fimmelgottlieb の役とあまり変りはない。

Ob ihm ein Gruß geIang, ein gnädiges Wort, eine gewinnende und doch würdevolle Handbewegung, war wichtig und entscheidend.<sup>16)</sup>

また、このような「ひとつの化身、一種の理想」(eine Art Ideal, ein Gefäß)とも言える王侯的存在は、生への「直接的な親密さ」(unmittelbare Vertraulichkeit)と相容れない。Dr. Überbein はこのことを弟子に次のように言う。

Aber Form und Unmittelbarkeit,—wissen Sin noch nicht, daß sich das ausschließt? Es schließt sich aus. Sie haben kein Recht auf unmittelbare Vertraulichkeit.<sup>17)</sup>

形式のための奉仕を義務づけられている王子は、生の世界に所属している直接性とは無縁であり、高貴の代償として直接性の放棄を要求されているのである。それ故、彼にとって、生活の享樂は許されない。詩人 Martini が言うように、生活は「禁断の花園」に外ならない。このような生の直接性の喪失、禁欲的理想生活から生ずるものは、疲労、憂鬱、倦怠、不毛であり、Klaus Heinrichをはじめ、王家のすべてのメンバーに重苦しくのしかかってくるのである。彼らは生の

13) ジェルジ・ルカーチ 片岡啓治訳「ロマンの魔術師」立風書房 1971年、69/70ページ

14) 同上、70ページ

15) 同上、70ページ

16) II, S. 171

17) II, S. 84

余計者として生から締め出され、活力を失いながらも、まじめなしつけや義務感に支えられて、痛ましく孤独にかろうじて生きている。

トーマス・マンは1903年12月5日付の Walter Opitz 宛の書簡で「大公殿下」の構想について触れているが、そのなかに次のような一節がある。

Man führt, möchte ich sagen, ein symbolisches, ein repräsentatives Dasein, ähnlich einem Fürsten,—und, sehen Sie! in diesem Pathos liegt der Keim zu einer ganz wunderlichen Sache, die ich einmal zu schreiben gedenke, einer Fürsten-Novelle, einem Gegenstück zu »Tonio Kröger«, das den Titel führen soll: »Königliche Hoheit«.<sup>18)</sup>

また、彼は小論「『大公殿下』について」のなかで、この作品の内容についてこう言っている。

Der Fürst, den ich eigentlich im Sinne hatte, ist der, von dem Schiller seinen Karl VII. sagen läßt : »Drum soll der Sänger mit dem König gehen, sie beide wohnen auf der Menschheit Höhen.« Die anspielungsreiche Analyse des fürstlichen Daseins als eines formalen, unsachlichen, übersachlichen, mit einem Worte artistischen Daseins und die Erlösung der Hoheit durch die Liebe: Das ist der Inhalt meines Romans.<sup>19)</sup>

これらはいずれも芸術家の存在形式と王侯のそれとの同一性を述べたもので、Tonio Krögerと Klaus Heinrich との共通性を表明しているのである。つまり、王子の「高位の職」(hoher Beruf)と、Tonio のそれとの類似の認識に基くものである。この点については、マンは「トニオ・クレーゲル」のなかでも、Tonio にはっきりと次のように言わせている。

Einen Künstler, einen wirklichen, nicht einen, dessen bürgerlicher Beruf die Kunst ist, sondern einen vorbestimmten und verdammten, ersehen Sie mit geringem Scharfblick aus einer Menschenmasse. Das Gefühl der Separation und Unzugehörigkeit, des Erkenntnis- und Beobachtetseins, etwas zugleich Königliches und Verlegenes ist in seinem Gesicht. In den Zügen eines Fürsten, der in Zivil durch eine Volksmenge schreitet, kann man etwas Ähnliches beobachten.<sup>20)</sup>

また、形式的な存在である Klaus Heinrich には、詩人 Martini が指摘するように、一切の個人的存在が否定されている。

Der Lebensgenuß ist, uns verwehrt streng verwehrt, wir machen uns kein Hehl daraus,—und zwar ist dabei unter Lebensgenuß nicht nur das Glück, sondern auch die Sorge, auch die Leidenschaft, kurz jede ernsthaftere Verbindung mit dem Leben

18) Thomas Mann: Briefe 1889—1936. S. Fischer Verlag, Fvankfurt am Main 1962. S. 40

19) XI, S. 570

20) VIII, S. 297

zu verstehen.<sup>21)</sup>

それ故、形式のために死んでいなければならない Klaus Heinrich は、創作のために死んでいなければならない<sup>22)</sup> Tonio Kröger に対応している。こうして Klaus Heinrich の存在は芸術家のアナログとなるのである。ということは、「大公殿下」が「ブデンブローク家の人々」のみならず、「トニオ・クレーゲル」の延長線上にもあることを示しているのである。

以上のように、「大公殿下」の基調には、マンの初期の長、短篇の主題が色濃く投影されている。しかし、彼はこの作品で重要な転回をとげており、童話的なものへの傾斜がそれであることはすでに述べたが、更に顕著な彼の Umorientierung は教養小説の要素の導入であり、政治参与の姿勢であろう。これまでのマンの諸作においては、前者については「トニオ・クレーゲル」の主人公の愛の生長に僅かに認められるが、後者についてはほとんど認められない。

作者はこの長篇の完成後数年にして政治的論争を開始し、その後はつねに政治を問題にし続けるが、このようなマンの社会的関心がこの作品を通して理解される。しかし、この問題は小説全体から見れば、やはり傍流であろう。従って、本論では教養小説の要素の方に焦点を合せて、主人公の発展を中心に、更に作品の検討を続けたい。周知のように、Bildung なる語の意味が従来さまざまに解釈されるとしても、教養小説はゲーテの「ヴィルヘルム・マイスターの徒弟時代」に代表されるように、ひとりの主人公が彼をとりまく人間的、文化的環境との相克のうちに自己を発見し内面形成を遂げるにいたる過程を描く小説形式である。<sup>23)</sup> そのためには、その主人公はある程度素朴であり、精神的な柔軟性の持主でなければならない。その点で、Klaus Heinrich は、教養小説の主人公としての資質を備えているといえよう。だからこそ、Dr. Überbein のさわやかな弁舌が王子の考え方や感じ方に、恐らく必要以上の影響を及ぼすのである。

Der Prinz war damals fünfzehn, sechzehn Jahre alt und also recht wohl fähig, solcherlei Ideen—wenn auch nicht wirklich aufzufassen, doch nach ihrem Wesensgehalt gleichsam aufzusaugen.<sup>24)</sup>

Klaus Heinrich は長篇第三作「魔の山」の「単純な」青年 Hans Castorp を思わせるものがある。

そこで、Klaus Heinrich は彼の目標に達していく過程において、無数の影響の下に、教育され、形成されていくのである。そして、その際、彼の前に意識的に現れる最大の教育者は Dr. Überbein であり、長篇「魔の山」に登場する教育者 Naphta や Settembrini の先人の役を果している。

21) II, S. 178

22) XI, S. 292

23) 日本独文学会編「ドイツ文学辞典」河出書房 昭和31年 180ページ

24) II, S. 88f.

Raoul Überbein —彼の言説には Nietzsche を思わせるものがあるが、その名前の響きも Nietzsche の Übermensch 及び Nietzsche の伝記作者 Raoul Richter へのイメージに連なる——は Klaus Heinrich が過した寄宿制王室神学校の助教師として、王子の家庭教師として、あるいは大学生 Klaus Heinrich の宿の世話係として、文字通り若き公子の教育者である。

彼の生いたちは暗く、みじめな幼年時代を送り、やがては天涯孤独の身となる。惨めな青春。孤独。この生来の不運児は、幸福や、恵まれた逸楽からは締め出されて、出世一途のきびしい生活に明け暮れ、才能だけを頼みの綱に、ひたすら他人を飛び起える。そして「働く必要がなく」で、「毎朝ゆっくり葉巻に火をつける」連中への軽蔑をむき出しにしながら、努力をかさね、破格の出世をするのである。

宮廷劇場で上演された「魔笛」を見物しての帰途、Dr. Überbein は歌手の「彼は王子です。彼はそれ以上です。彼は人間です」という台詞をそっくり真似て皆を笑わせるが、その翌日の王子との個人教授の際に彼は、再びこの台詞に触れてから、そこに含まれるヒューマニズムをはげしく攻撃して次のように言う。

Es gibt Paradoxe, die so lange auf dem Kopfe gestanden haben, daß man sie auf die Füße stellen muß, um wieder etwas leidlich Verwegenes daraus zu machen. >Er ist ein Mensch...Er ist mehr als das<, —das ist nachgerade kühner, es ist schöner, es ist sogar wahrer... Das Umgekehrte ist bloße Humanität; aber ich bin von Herzen nicht sehr für Humanität, ich rede mit dem größten Vergnügen wegwerfend davon. Man muß in irgendeinem Sinne zu denen gehören, von welchen das Volk spricht: >Es sind schließlich auch Menschen<sup>25)</sup><

彼はここで人間の単純な平等主義は感傷にしか過ぎないとしてきっぱりと否定し、更に続けて、Klaus Heinrich に人間の代表としてのけわしい君主の道、王侯の課題を弁舌さわやかに説き示す。

Denn der Geist, Klaus Heinrich, der Geist ist der Hofmeister, der unerbittlich auf Würde dringt, ja die Würde erst eigentlich schafft, er ist der Erzfeind und vornehme Gegner aller humanen Gemütlichkeit. >Mehr als das?< Nein! Repräsentieren, für viele stehen, indem man sich darstellt, der erhöhte und zuchtvolle Ausdruck einer Menge sein,—Repräsentieren ist selbstverständlich mehr und höher als einfach Sein, Klaus Heinrich, —darum nennt man Sie Hoheit...<sup>26)</sup>

Dr. Überbein は「広い世間を渡り歩いてきた男の優越感」にあふれて、しゃべりまくるが、「その快活な精神は対象を明確にとらえて、かたときも見失わなかった」ので、Klaus Heinrich

25) II, S. 88

26) II, S. 88



は師の言葉に真剣に耳を傾ける。Dr. Überbein は更に *außerordentlich* なもの、*einmalig* なものへの愛について次のように述べる。

Ich liebe das Ungewöhnliche in jeder Gestalt und in jedem Sinne, ich liebe die mit der Würde der Ausnahme im Herzen, die Gezeichneten, die als Fremdlinge Kennzeichen, all die, bei deren Anblick das Volk dumme Gesichter macht.<sup>27)</sup>

つまり、彼はこの愛によって、Klaus Heinrich に平均的で従順な人間への怪蔑を引き出そうとするのである。そして彼は言う。

Abgeschlossenheit, Etikette, Verpflichtung, Strammheit, Haltung, Form,—wer darin lebt, sollte kein Recht auf Verachtung haben? Er sollte sich auf Menschlichkeit und Gemütlichkeit verweisen lassen<sup>28)</sup>

このような Dr.Überbein の教育によって、Klaus Heinrich は「高貴との共感」を獲得し、形式的な存在に徹底することによって、たとえ無内容であれ、その職業を果すことに没頭しなければならないことに気づく。従って、当然、彼は個人的な生活とのかかわり合いを放棄する。彼は自分の立場の孤独を必要なものとして受入れ、「距離」が存在しなければならないということを容認する。彼の心は師に対する「名状しがたい感謝」の気持で満され、彼が得た知識は、彼を師に対して「未長く」結びつけたのである。

続いて登場するのは生の詩人 Axel Martini で、彼は

ein begeistertes Loblied auf die Lebenslust oder vielmehr ein überaus stürmischer Ausbruch der Lebenslust selbst, ein hinreißender Hymnus auf des Lebens Schönheit und Furchtbarkeit<sup>29)</sup>

をうたうが、このような生の讃歌を生み出すためには、彼も生の享楽を断念しなければならない。彼はその詩の世界とは全く逆の世界に住んでいるのである。そこで、彼は Klaus Heinrich にこのことを次のように述べている。

Es ist eine weit verbreitete Anschauung, daß die Entbehrung der Wirklichkeit für meinesgleichen der Nährboden alles Talent, die Quelle aller Begeisterung, ja recht eigentlich unser einflüsternder Genius ist. Der Lebensgenuß ist uns verwehrt, streng verwehrt, wir machen uns kein Hehl daraus,—und zwar ist dabei unter Lebensgenuß nicht nur das Glück, sondern auch die Sorge, auch die Leidenschaft, kurz jede ernsthaftere Verbindung mit dem Leben zu verstehen.<sup>30)</sup>

これは同時に Klaus の内面をも雄弁に説明している。

27) II, S. 86

28) II, S. 86

29) II, S. 173

30) II, S. 177f.

Martini は生のイデーを代表し、Klaus Heinrich は国民を代表するという違いはあっても、ともに同じ形式に属しており、生への憧憬を断念して職務を果しているという点では、両者は同じパターンの人間で、同じ危険に直面しているといえよう。Martini は Dr. Überbein と同じ側から、Klaus Heinrich に生のイデーを補足するのであるが、王子はこの貧相な詩人よりは、自信に満ち、毅然として、Aristokratismus を説く Dr. Überbein により共感を覚えるのである。Klaus Heinrich は不健康な容姿で「うるわしき人生」をうたうかと思うと、十時には床につき、衛生上の理由から生活に「距離」をおくくせに、百姓娘と田舎を疾走する青年を羨望するこの詩人の判断にとまどう。それ故、Klaus Heinrich はこの詩人との会見のもようを妹の Ditlinde に話すとき、次のような感想を述べるのである。

Aber ich weiß doch nicht, ob ich mich freuen kann, ihn kennengelernt zu haben, denn er hat etwas Abschreckendes, Ditlinde, ja, er ist bei all dem entschieden ein bißchen widerlich.<sup>31)</sup>

破産に瀕した公国にアメリカから大金持ちの父娘が移住して来ると、小説の雰囲気は今までの暗い調子とうつて変って明るい色調を帯びてくる。それと同時に、Klaus Heinrich は師の Dr. Überbein の説の Nietzsche の英雄的 Ethik から次第に離反し始めるが、その際、王子の転向へ決定的な影響を与えるのが、この大金持の娘 Imma Spoelmann である。

彼女は人をちょっぴり皮肉な傾向のある数学専攻の愛らしい女子学生であるが、彼女も Klaus Heinrich と同じように孤独で形式的な存在形式に悩んでいる。なぜなら、彼女は王侯のいわゆる見世物的生活にあたる „for show“ の生活を送っているのみならず、王侯がその職務によって人生から疎外されていると同様に、父の富の故に人生に対して「距離」をおかざるを得ないからである。

そこで Imma は王子に自分の悩みを打ち明けて言う。

...und was mich betrifft, so war ich von jeher ein wenig allein und abgesondert gewesen und vollständig ununterrichtet geblieben, wenn ich von meinen Universitätsstudien absehe...<sup>32)</sup>

これに対して、彼は

Nicht wahr, Sie waren von jeher ein wenig allein und abgesondert!<sup>33)</sup>

と共感の喜びを述べるが、後になって彼女を正式に「かわいい妹」と呼ぶことができるのである。しかし、なんといても Imma は市民の出であるだけに王子よりはより多く人生への関係を所有している。それ故、彼女は王侯の品位以外には関心を持たないでいる Klaus Heinrich に現

31) II, S. 181

32) II, S. 255

33) II, S. 255

実への関心を呼びさます資格があるのである。

Imma の教育によって、Klaus Heinrich は幸福に敵意を抱いている Dr. Überbein から次第に離れていくのを感じる。

Aber in letzter Zeit habe ich oftmals über ihn nachgedacht, und als Sie damals so über ihn geurteilt hatten, da habe ich mich mehrere Stunden lang mit Ihrem Urteil beschäftigt und mußte Ihnen recht geben. Denn ich will Ihnen sagen, Imma, welche Bewandnis es mit Doktor Überbein hat. Er lebt in Feindschaft mit dem Glücke, — das ist es.<sup>34)</sup>

こうして彼は「魔の山」の Hans Castorp のように一步一步生のなかへは行って行くが、Dr. Überbein の影響は Imma によって最終的に取り除かれる。そして、一切の救済を拒否するこのニーチェ主義者は、結局自殺して果てる。

Der friedlose und ungemütliche Mann, der niemals am Stammtisch ein Mensch unter Menschen gewesen war, der hochmütig alle Vertraulichkeit verschmähnt, sein Leben kalt und ausschließlich auf die Leistung gestellt und gewöhnt hatte, daß er darum alle Welt väterlich behandeln dürfe, — da lag er denn nun; das erstbeste Ungemach, die erste Mißwende auf dem Felde der Leistung hatte ihn elend zu Falle gebracht.<sup>35)</sup>

この必然的な最後に彼の大作「ファウストゥス博士」の Adrian Leberkühn の面影を認め<sup>36)</sup>のは、あながち見当違いではあるまい。

Imma は市民的能力を装飾的形式よりも高く評価し、真の Menschlichkeit は「貴族的で憂鬱な」個人主義とは相容れないとする。彼女は王子を真の Menschlichkeit へ向わせるが、彼が人間的な暖かさを増すにつれて、二人の間には意志の疎通が可能になり、お互の孤独が克服され、愛情が芽生え、幸福が与えられるのである。Paul Altenberg は Imma に、「魔の山」に登場するマダム Chauchat の萌芽を見てとり、Imma の Menschlichkeit のモチーフが、そこで、更に詳細に展開されているということを強調しているが、<sup>37)</sup> 当を得ていると思われる。

二人の主役 Klaus Heinrich と Imma Spoelmann とが真の意味での幸福に到達するためには、更に、國務大臣と外務大臣、そのうえ、大公家の内大臣も兼ねている老 Knobelsdorff 卿の導きが必要である。マンは彼が登場してくるくだりを次のように描写している。

Das Verdienst, die Dinge auf den Boden der Wirklichkeit gestellt, den Geschehnis-

34) II, S. 304

35) II, S. 352

36) Eike Middell: Thomas Mann. Versuch einer Einführung in Leben und Werk. Verlag Philipp Reclam jun. Leipzig, S. 87

37) Paul Altenberg: Die Romane Thomas Manns. Hermann Gentner Verlag, Bad Homburg vor der Höhe 1961, S. 37

sen die Richtung zu einem glückseligen Ausgang gegeben zu haben, wird immer dem hochgestellten Manne zugesprochen werden müssen, der bis dahin eine weise Zurückhaltung beobachtet hatte, im richtigen Augenblick aber mit behutsam fester Hand in die Ereignisse eingriff.<sup>38)</sup>

そして、Knobelsdorff が次のように Klaus Heinrich に語る言葉は、彼の王子に施した教育の方向を要約していると思われる。

Königliche Hoheit sind durch Ihre erhabene Bestimmung dem rauhen Getriebe der Wirklichkeit entrückt, durch schöne Vorkehrungen davon geschieden. Ich werde nicht vergessen, daß dieses Getriebe nicht—oder doch nur mittelbar—Eurer Königlichen Hoheit Sache ist. Dennoch scheint mir der Augenblick gekommen, Eurer Königlichen Hoheit wenigstens ein gewisses Gebiet dieser rauhen Welt, ganz um seiner selbst willen, zu unmittelbarer Anschauung und Einsicht nahezubringen.<sup>39)</sup>

Knobelsdorff はこの公国の苦しい経済状態をありのままに説明する。

Und nun erfolgte, anknüpfend an die Mißhelligkeiten mit der Budget-Kommission, jener Vortrag, jene klare, gründliche und ungeschminkte, mit Ziffern und eingeschobenen Erläuterungen der Grundverhältnisse und Fachausdrücke wohlausgestattete Belehrung und Unterrichtsstunde über die wirtschaftliche Lage des Landes, des Staates, die dem Prinzen unser ganzes Leidwesen in unerbittlicher Deutlichkeit vor Augen rückte.<sup>40)</sup>

彼のこのような教育の結果、王子は自発的に経済学を研究する。やがて、それは Imma との共同研究にまで発展するが、王子の現実への関心は、マンの主人公にとっては、画期的な新事実であり、すでに触れたように、この長篇の持つ重要な意義のひとつもここにあったのである。

かくて、Klaus Heinrich は彼と大金持の娘との結婚を、Knobelsdorff が言うように、個人的な結びつきであると同時に民族と国家との「大局的な全体の立場」から、つまり、経済的な問題性もふまえて理解しなければならないということに自覚する。この条件の充足の下においてのみ結婚が可能であるということに彼は気づく。Klaus Heinrich が没頭した実学は、彼がそこに生き、代表しなければならないところの広範囲の生の現実を認識させる。そして、それが、彼に傾きながらも、「いずれとも心を決しかねる不安、冷たい嘲笑的な自分の世界を捨てて、彼のもとへ走るのをためらうこの気持ちに」どうしても打ち勝てないでいる Imma の信頼をよび起すのである。その決定的な箇所王子と Imma の会話は次のように行なわれる。

„Aber nur unter einer Bedingung darf ich es, nämlich, daß wir nicht in eigennüt-

38) II, S. 309

39) II, S. 318

40) II, S. 319

ziger und unbedeutender Weise nur auf unser eigenes Glück Bedacht nehmen, sondern alles aus dem Gesichtspunkt des Großen, Ganzen betrachten. Denn die öffentliche Wohlfahrt, sehen Sie, und unser Glück, die bedingen sich gegenseitig.“ „Wohl gesprochen, Prinz. Denn ohne unsere Studien über die öffentliche Wohlfahrt würde ich mich schwerlich zum Vertrauen zu Ihnen entschlossen haben“.<sup>41)</sup>

こうして、Klaus Heinrich の教育は完成し、小説はしあわせな結末を迎える。彼の結婚は公国を破産から救い、新婚の二人は新しい生を確実なものにするのである。

物語の結末で、われわれが認識するこの物語の意味は、個人が人間に奉仕するという意志によって、無気力と諦念とから救済され、行動のエネルギーが与えられるということである。ここにおいて、トーマス・マンは没落の Humanität にかわる新しい行動のそれを予感している。つまり、「デカダンスの詩人」はデカダンス克服の表現者となったのである。

ということは、Alois Hofman が指摘するように、著者が、ここでも「トニオ・クレーゲル」と同じ主題を繰返しているように見える。しかし決してそうではない。この点については、Hermann J. Weigand がその「大公殿下」論の中で見事に説明しているので、少しそれを引用してみよう。

「この長篇小説は、トーマス・マンがすでに『トニオクレーゲル』で非常に詳しく取扱った同じ主題の変転であって、繰返してではない。なぜなら、『トニオ・クレーゲル』という作品とクラウス・ハインリッヒをめぐる作品の精神的容貌は青年と大人の容貌ほど異っているからだ。したがってトニオ・クレーゲルは、彼が奉仕し愛している両方の世界のいずれにも本来安住することのない、引き裂かれたものであり、結末になってようやく、自分の存在の矛盾の解決がおぼろげにわかってくるのである。それに反しクラウス・ハインリヒの場合には、形式的業績の持つ倫理的性格があらかじめはるかに強調されており、詩人と、詩人の職業に代表的威厳を与える共同社会との結合の思想が、この作品の全構造を支える土台である。」<sup>42)</sup> しかも Tonio は自力で解決を予感するが、Klaus Heinrich は教育によってこの思想を獲得する。

Klaus Heinrich の「きびしい幸福」は、Tonio Kröger のそれよりも人間的な決然とした理想の表現である。マンが婚約者 Katja へ宛てた手紙の一節で、Tonio が抱いた愛とは異なる愛を告白しているのはこのことを裏づけるものであろう。

T[onio] K[röger] hatte das »Leben« geliebt, die blauägige Gewöhnlichkeit, wehmüthig, spöttisch und hoffnungslos. Und nun? Ein Wesen, süß wie die Welt—und gut, und ungemain, und fähig (wenn auch vielleicht nicht willens), mir mit Geist

41) II, S. 337

42) トーマス・マン全集 別巻 新潮社 1972年 207/208ページ

und Güte entgegenzukommen: etwas absolut und unglaublich Neues! Diese Liebe, überhaupt die stärkste, ist in diesem Betracht, was da kommen möge, meine erste und einzige glückliche Liebe...<sup>43)</sup>

「大公殿下」において、デカダンスの分析に始まりデカダンスの克服を試みる著者は、Tonio Kröger が夢見るだけに終った目標に到達するために「診断」(Diagnose) から「治療」(Therapie) に移っているとする Roman Karst の指適は、<sup>44)</sup> 問題の核心に触れたものといえよう。

彼はまた、「大公殿下」がマンの初期の時代と成熟期のそれとを結びつける「連結リンク」(Zwischenglied) つまり、「ブデンブローク家の人々」と「魔の山」との間の橋であると言っているが、マン自身も自作についての一文中で、同様の意味のことを説明して次のように述べている。

Welches auch immer das spezifische Eigengewicht der Prinzengeschichte sein möge, —in dem Leben ihres Verfassers steht sie an ihrem notwendigen Platz, und er muß wünschen, das Vergnügen, das sie dem Leser etwa gewährt, möchte durch die biographische Einsicht vertieft werden, daß ohne sie weder der >Zauberberg< noch >Joseph und seine Brüder< zu denken sind.<sup>45)</sup>

この見地から「大公殿下」を見ると、すでに見たように、後の大作で、深まり変転する主題の略図が描かれており、この主題の先取りは主人公をはじめとする登場人物の性格づけにおいて特に顕著に認められるのである。

最後にもう一度、マンの自作についての見解を聞いてみよう。彼は機を見るに敏なオポチュニストでは決してないが、根元的な命題に立脚して、その変転を押し進めていくタイプの作家である。

Ich zweifle nicht, daß ich dem Wunsch des deutschen Bürgertums am besten genügt hätte, wenn ich mein Leben lang lauter >Buddenbrooks< geschrieben hätte. Eben das aber war nicht meine Sache und genügte den Ansprüchen nicht, die ich an mich selber stellte. Novarum rerum cupidus zu sein, darin schien mir immer die Ehre des Künstlers zu bestehen; ich suchte nach neuen Wegen, hatte sie in den Novellen, die zunächst auf >Buddenbrooks< folgten, längst gesucht und ging sie in >Königliche Hoheit< weiter.<sup>46)</sup>

「大公殿下」の欠点については、陰影に富む深刻な前半と、いかにも平板な色調の後半とのアンバランス、また、Henry Hatfield が指摘しているごとき諸種のくい違い、<sup>47)</sup> 問題掘り下げの不足

43) Thomas Mann: Briefe 1889—1936. S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main 1962, S. 53

44) Roman Karst: Thomas Mann. Verlag Fritz Molden, Wien—München—Zürich 1970, S. 65

45) XI, S. 574

46) XI, S. 573 f.

47) Henry Hatfield: Thomas Mann. An Introduction to his Fiction. Peter Owen Limited, London 1951, p.60

からくる中途半端な印象などについて列挙することができる。しかし、これら多くの欠陥をもちながらも、この作品は次の諸作の「前奏曲」として、ここではまだ不協和音を伴いながら、偉大な可能性に満ちたメロディーを奏していることがこの作品のもつ最大の意義となっていることについて本論で追究した。

## 参 考 文 献

- Hans Eichner: Thomas Mann. Eine Einführung in sein Werk. Franke Verlag, Bern 1953  
 Inge Diersen: Untersuchungen zu Thomas Mann. Rütten & Loening, Berlin 1959  
 Eike Middell: Thomas Mann. Versuch einer Einführung in Leben und Werk. Verlag Philipp Reclam jun. Leipzig  
 Henry Hatfield: Thomas Mann. An Introduction to his Fiction. Peter Owen Limited, London 1951  
 Romam Karst: Thomas Mann. Verlag Fritz Molden, Wien-München-Zürich 1970  
 Christoph Geiser: Naturalismus und Symbolismus in Frühwerk Thomas Manns. A.Francke AG Verlag, Bern 1971  
 Hans M. Wolf: Thomas Mann. A. Francke AG. Verlag, Bern 1957  
 Paul Altenberg: Die Romane Thomas Manns. Hermann Gentner Verlag, Bad Homburg vor der Höhe 1961  
 Jürgen Scharfshwerdt: Thomas Mann und deutsche Bildungsroman. Kohlhammer, Stuttgart 1967  
 Arnold Bauer: Thomas Mann. Colloquium Verlag, Berlin 1960  
 Alois Hofman: Thomas Mann und die Welt der russischen Literatur. Akademie-Verlag, Berlin 1967  
 佐藤晃一 「トーマス・マンの世界」 大修館書店 昭和37年  
 ジェルジ・ルカーチ 片岡啓治訳 「ロマンの魔術師」 立風書房 1971年

